京都帝國大學經濟學會

經濟論叢

第十三卷　第六號

大正十年十二月一日發行

論叢

我所得稅と普遍の原則　法學博士　小川鄉太郎
植民政策是非　文學博士　原勝郎
朝鮮の三開港場　文學博士　三浦周行
進歩か退歩か　法學博士　財部靜治
農業勞働問題　法學博士　河田嗣郎

時論

米國の排日問題　法學博士　末廣重雄
財産稅案に對する諸種の非難に答ふ　法學博士　神戸正雄

說苑

リッケルトの價値體系　文學博士　米田庄太郎

雜錄

マルクス主義に所謂過渡期　法學博士　河上肇
伯林最近の生活費　法學士　汐見三郎

附錄　本誌第十三卷總目錄

說苑

リッケルトの價値體系

米田庄太郎

本文はリッケルドが「ローゴス」第四卷に於て公にされたる有名なる論文（「Zur System der Werte）の始めの一部分を除げば、其の殆んど全體に亘りて稍々詳しく譯述せるものである。余は此の論文は當に哲學の研究者にとりて重要であるのみならず、又經濟學上の價値論の研究に於ても、其の深き哲學的基礎を探究せんとするものには、甚だ重要であると考へ、此處に之を掲げることゝしたのである。

第一節　「開かれた體系」
第二節　完全終結の三階級
第三節　觀照と活動及び物件と人格　（本號所載）
第四節　六つの價値範域
第五節　學問と世界觀　（次號掲載）

第一節　開かれた體系

體系問題　夫れ今日の哲學界に於ては、體系を排斥する傾向が、一般に行なはれて居る。而して其の體系を排斥せんとする理由は、又價値學としての哲學にも適用される。併し夫れが爲めに

吾人は全然哲學の體系化を放棄す可きか。體系意志と云へは、夫れは常に識見の狹小なること、及び不公平なる事と結び附て居るので、識見の廣大なること及び公平なることは、到底體系意志と結び附き得ないものであるか。換言すれば體系と云へは、夫れは其の中に新しきものに對して、何等の餘地をも存しないほど、總て完結し、閉ぢられたものでなければならぬか。哲學が若し吾人の「開かれた體系」と稱し得るものを求めるならば、其の體系化せんとするを妨げ得る、如何なる理由も存在しないと思ふ。

開かれた體系　併し「開かれた體系」とは何を意味するか。一の思想構成物が、同一の關係に於て組織的、體系的であると同時に、開かれて居ると云ふ意味であるか。是れは一の矛盾を生ずるであらう。併し此處に開かれた體系と云ふは、かゝる意味のものではない。開かれて居ると云ふは、寧ろ只歷史的文化生活の不完結性或は不閉鎖性を、正當に取扱ふ可き必要を意味するだけである。而して正當に解せられたる組織化或は體系化は一切の歷史を拔き出で、夫れ故に歷史とは衝突しない諸因素に基いて行なはれ得るのである。之れによりて吾人は少なくも一の問題を發見した。而して此の問題の解決は、結局如何なる道に於て達せらる可きかを、先づ考へて見たいと思ふ。

開かれた體系の問題及び其の解決の根本方針　さはれ夫れに先だち、此處に眞に一の必然的な問題が、取扱はれて居ることを、明らかにする必要があると思ふ。夫れ生活の意義を闡明するに充分なる一の價値體系が、只歷史的材料の助けのみを以て、建設し得られると考へることも出

來よう。而して夫れが爲めには、只現實に存在する文化財を、之れに附着する價値に從ふて根本的に相互に區別される部類の一定數の中に收め、此くて總ての他の學問のなす如くに、其の資料を調整すれば、それだけでよい樣に思はれる。實際に於て、カント以後の價値哲學の歷史を一瞥すると、哲學の問題の附着する價値の調整は、少なくも價値の主要部類は何であるかに就て、一般的な一致が行はれて居るほどまでも、既に發達して居るが如くに見える。カントは論理的、審美的、倫理的及び、宗教的價値の、四種の價値を取拔ふて居る。而して學問的、藝術的、倫理的及び宗教的或は「形而上學的」生活の分類によりて、(吾人若し此等の概念を只充分に廣く解しさへすれば、)哲學問題の發生し來る文化の歷史的諸範域は、完結されて居ると認められ得るので、少なくも今日までには、人々は根本的には夫れ以上に達して居ない。今日現はれたる最とも包括的な價値哲學、卽ちミュンスターベルヒの價値哲學でも矢張り、此の四部類別以上に進んで居ない。そこで左の如き說が立て得られる。

今價値體系論に於ては、價値の主要部類は既に確立されて居るので、問題として殘るは、只其等主要部類內に於て、組織的秩序を立てることだけである。而して此の場合に起る總ての問題も亦歷史的材料によりて正當に解決さる可きものであらねばならぬであらう。併し人々は決して夫れ以上を望むを許されない。もつとも哲學はかゝる方法にて、總ての時代に妥當する一體系を完成するものでない。しかも人々が哲學を世界觀論として、眞に正當に理解する時には、哲學が若し自分の時代を、思想上正當に摑むならば、夫れで其の職分を充分に遂成したものと認められる。發達

はより多くを成就する爲めに、常に前の企だてを通り越して行つた。其等の企だては完成される瞬間に直ちに死滅し、そうして歷史の墓場に葬られた。然らば吾人は何の爲めに、此等の墓をもう一つ增やす可きか。吾人は只生きた現在に體系を結び附けるほど、夫れが生命を有するものであることを益々確信するのである。されば吾人は學問發達の進行中に於て、吾人の思想を以て只一階段だけでも表現するならば、まさしく其の事情は吾人を將來に結び附けるのである。將來は吾人が止まらなければならなかつた處で、更に步を進め、此くて吾人の仕事を續けるであらう。今日の吾人は、完結性の要求を意識的に放棄することに於て、今日の吾人の强みを求めることが出來るのであるまいか。

或意味に於ては、右に述べし見解は正當であると、認めることが出來ると思はれる。そうして哲學は先づ歷史的に與へられたる文化財に於て價値を發見し、夫れより之を調整し、或は秩序立てる可きものであると云ふことは、全然正當である。併し夫れによりて價値の體系化の問題は、まだ解決されない。つまりは吾人は調整或は秩序立てると云ふことを、如何に解するかに歸着する。吾人が體系と稱する結合（ツーザムメンジュナルング）は、單なる並列であつてはならぬ。秩序に於ては、寧ろ一の原理が固着して居ねばならない。併し吾人は其の原理を、歷史から引き出すことが、出來るであらうか。

吾人は只與へられたる材料の分類を企だてるに限りに於ても、尙ほ完全を望むであらう。此くて吾人は既に超歷史的なるものへ一步踏み込むのである。吾人は其の諸部類が相互に排斥して、

一部類にはまり込まぬ總ては、必然的に他の部類に屬すると云ふが如き分類を求める。一例を擧げて說明すれば、一切の文化財は人格であるか、又は人格でないか、此くて物件（ゴーベン）であるかである。又彼等に對する吾人の態度は、能働的であるとしてか、又は能働的でないとしてか、此くて靜觀的であるとしてか、決定さる可きである。そうしてかゝる明らかなる二者擇一（アルテルナチヴ）に基づける一體系を構成することが出來るならば、吾人は啻に現存の文化財に固着する、價値の總觀を得るのみならず、又歷史的發達に於て新たに現はれる生產物をも、其の中にはめ込むことを望み得る。蓋し吾人は右の例に就て云へば、人格でも亦物件でもなく、而して之れに對して能働的でも亦靜觀的でもない態度をとり得る樣な文化財が、如何にして生起するであらうかを、考へ得ないからである。而して此の事は既に、如何に各體系に於て超歷史的因素が發見され、又如何に夫れが歷史的なるものと結合され得て、以て一の開かれたる體系が成立するかを示すのである。

併し吾人は右の如き完全な價値の分類を、設定したと考へても、尙ほ一の世界觀を與へると云ふ哲學の任務を憶ひ起すときには、夫れで滿足することが出來ない。價値の分類に於て、吾人の生活の意義が統一的に闡明されねばならないのである。卽ち生活の多樣が、總てを包括する一中心に、結ひ付けられねばならないのである。而して此の統一の原理が、又意義闡明の根柢に存す可き價値體系に於て缺けてはならぬ。併し吾人は只完全であるだけの一分類に於て、かゝる原理を求めんとしても無益である。かゝる分類に於ては、價値が其の妥當力に關して價値として有する秩序が缺けて居る。卽ちかゝる分類はまだ階段順序或は位階秩序として解さる可きでない。併し

吾人の生活意義の統一的闡明が、問題となる時には、吾人はまさしく價値を相互に對して、評價することが、可能であるを要する。されば哲學は、現存の文化財に於て見出さるべき材料を、更に他の仕方にて、一の超歷史的體系中に取り上げねばならぬ。夫れは純歷史的なるものから、決して除去され得ない偶然性を、位階秩序の必然性と結び附けねばならぬ。此くて夫れより生起する完結的或は閉鎖的價値結合に於ても亦、尙ほ歷史的生活の不完結性、不閉鎖性の爲めに、餘地が存せねばならぬ。此くて開かれた體系の概念に固着する困難が、始めて明らかに現はれてくるのである。

併し此の困難は、除去され得ないものであるか。既に指示せし如く、組織化或は體系化の困難は、價値が見出さる可き唯一の材料は、絕へず發達しつゝあるものであると云ふ事情から起るのである。進化思想或は發達思想から考ふれば、總てが不確實にして、動搖しつゝあるか如くに見える。而かも此の思想の適用は、吾人若し發達其物を除いて、總てが發達し得ることに付て考へる時には、容易に洞察される如く、一の動かし難き限界を有つて居る。各々の發達の前提として妥當す可きものは、發達を超脫し、夫れ故に又一の超歷史的性質を示す。吾人は絕對的進化主義(發達主義)を斥ける此の單純なる思想を、價値哲學の展開に適用して見る。價値哲學は歷史的文化狀態と共に、內容上常に變動するとしても、しかも其の形式的前提に屬するものは、發達の流から脫しなければならぬ。併し夫れが爲めには吾人は第一に妥當する或價値を見定め、第二に非實在的な價値が附着する或實在的な財を見定め、而して第三に價値及び財に對して評價する態度

をとる主觀を見定めねばならぬ。蓋しかゝる主觀に對してのみ、世界觀は其の生活意義の闡明として成立するからである。吾人は此等の內容上決定されない概念の一團を以て、價値哲學が歷史的發達から浮び上る限りに於て、價値實現の諸階段の形式的概念を作る企だてをなし得るのである。今其等の價値は評價する態度をとる主觀に對して、一の定まれる位階秩序に於て排列されるのであるが、然るに其の位階秩序は只主觀によりて評價される一切の價値及び財に、必然的に屬するものにのみ基いて立てられるが故に、新しき文化財の其の後の發達によりて、再び覆されないであらう。吾人は此の如き超歷史的價値結合を樹立したときには、更に之を內容上充實されたる歷史的生活と、結合することが出來る。而して其處に事實上存在する文化財に對して、一の完全なる分類の助けを以て、一の秩序を作ることが出來た場合に、結局両秩序の結合からして、一の體系が自から構成されねばならぬ。此の體系にありては、一方に於ては種々なる價値は、其の內容に關しても亦階段連續の統一的結合中に立ち、而して他方に於ては歷史的文化財の閉ぢられない豐富に對して、尙ほ餘地が設けられて居るのである。

以上述べし處によりて、吾人は啻に價値の一の開かれた體系の問題を明示したゞけでなく、又其の解決の求めらる可き方針をも明示したのである。されど吾人若し夫れが結局生活意義の闡明に對して、何をなし得るかを知らんと欲するならば、此處で止まるを許されない、更に又少なくも其の內容を指示せねばならぬ。されば吾人は先づ價値の超歷史的位階秩序を圖式的に案出し、之れに基いて文化財の一の完全なる分類に對する主要原理を決定し、而して終りに、吾人は若し

其等の階段を歷史的生活の按排されたる價値多樣性と結合するならば、如何なる體系が成立するかを示さうと思ふ。夫れよりして又、哲學は如何なる意味にて、一の統一的世界觀を與へ得るかが、根本的に理解されるであらう。併し吾人は此處では既に世界觀を含むのでなく、只之れに對する基礎を含むだけの價値體系を考究するに限ることとする。

第二節　完全終結の三階段(Die drei Stufen der Voll-Endung)

價値階段の構成の原理　今價値哲學に於ては、先づ第一に價値其物を其の妥當性に於て取扱ふものなるを、注意するを要す。隨ふて吾人は、只價値と結び付けられたる實在のみを、考察してはならぬ。されど他方に於ては、一の組織的秩序を立てんとする企だてに於て、財及び評價を看過することは出來ない。只財に於てのみ、價値が見出され得るのであると云ふことを、暫らく看過するも、主觀の態度は價値の階段連續が取扱はれる時には、直ちに重要となる。是れ價値の位階秩序に基づく生活の意義は、常に主觀に對しての意義であるからである。階段連續は始めから主觀に對して成立し、妥當するものとして、解されねばならぬ。されば吾人は其の原理を確立する爲めに、評價する爲めに評價する態度から出發するのである。是れは吾人が評價、財及び價値の概念的區別に注目して、價値の妥當性を價値に對する心理的態度の中に溶かさうとしない以上、論議するを要しない事である。吾人は一般に只價値に關して、評價に內存する「意義」のみを問題とし、其の價値無頓着な心理的實在を、問題としないのである。而して此の意義は其の差異性に

於て、只價値の差異によりてのみ、規定されるが故に、主觀との關係に於て現はれる階段構成の原理は、又財及び價値其物の階段をも決定するものであらねばならぬ。

完全終結への傾向　今財に於て價値を實現せんとする各主觀は、一の目標を立てる。而して之れに達せんとする努力は、只主觀が其の目標に到達するか、又は之れに到達するに近づく時にのみ、主觀に對して意義あるものと考へられるであらう。換言すれば、主觀は努力の一の終極に向つて進み、而して努力が其の定まれる終極に達する時は、之を無用ならしめんとする傾向を有す。吾人が終極に達した時には、夫れと同時に努力は終はるのである。併し同時に其の終極が、完全終極と稱し得られる時にのみ、卽ち其の中には同じ方針に於て新しき努力に導く、何等の隙間も殘らない時にのみ、終極に到達されたと考へられるであらう。されば吾人は總ての意義あり、價値實現に向けられたる態度の有する傾向を、一般的に「完全終結への傾向」(Tendanz zur Voll-Endung) と云はんとするのである。此の傾向は一般に價値實現の本質に屬する以上、價値の各位階を決定するものであらねばならぬ。されば夫れは單に歷史的な意義よりも以上の意義を有する形式的因素に數へ得られるのである。

完全終結の三階段　併し只此の傾向のみからは、階段の設定に必要と思はれる何物も生じない。されば吾人は之を、均しく歷史的であるよりは以上である處の、他の概念と結合せねばならぬ。今總ての價値實現には、一の「形式」が加はることによりて、價値が引き出される一の內容、或は價値的に形成さる可き一の內容が、必要であるが、吾人は此の內容を、諸部分から成立する一の

全體として、考へることが出來る。而して全體は任意な、或は限りなき多くの部分を、有すると云ふ意味にて、吾人は之を見渡し難きものと認め、一の終結的なる全體と、其の不終結的なる部分との對立を、完全終結の傾向と結合すると、此處に根本的に相異なれる諸價値が附着する財に於て、價値實現の幾多の仕方を區別することが出來る。完全終結の傾向が、材料の盡きざる全體に向けられる時には、有限なる主觀は決して形成を終はることが出來ない。されば其の場合には、到達される諸目標は只一の發達進行に於ける諸階段としての重要を有するだけである。そこで吾人は財の一範域を立て、之を不終結的全體 (die un-endliche Totalität) の範域と稱す。但し此の場合に於ては、不終結性と云ふは、只消極的に解さる可きもの、即ち完結されない、或は終りがないと云ふ意味だけに解さる可きものにして、つまり完全終結性に對立するものである。更に完全終結の傾向は、只材料の一の終結的部分を、形成することだけに止まり得る。而して其の場合には終極に到達することを妨げる何物も存しない。そこで吾人は完全終結的箇體 (die Voll-endliche Partikularität) の範域として、特質附けられる財の一範域を、立てることが出來る。終りに尙ほ一の第三範域を立てることが可能である。夫れは右の二つの範域の總合を現はすものにして、吾人は之を完全終結的全體 (die Voll-endliche Totalität) の範域と稱することが出來る。此の範域に於て、吾人は價値實現の努力が行なはれ得る最後の目標を與へられる。夫れと同時に此の見地の下では、必然的價値の附着する財の範域の數が盡きて居る。尙ほ更に一の第四の結合、即ち不終結的な或は完成されない箇體 (die un-endliche oder unvollendete Partikularität) と云ふ一の結合

が考へ得られる。併し之れに屬する事物は、完全終結の傾向からしては、財として解されるを許されない。是れ其等の事物にありては、一の完全なる結極に達することも、亦之れに近づくことも、取扱はれ居ないからである。

今價値實現及び完全終結に對する總ての努力は、時間に於て行なはれることを考へると、吾人は三つの範域を尙ほ他の仕方で特質附けることが出來る。此くて不終結的全體の財は、只一の進歩過程に於ける諸階段に外ならぬものであるから、其等の財の完成意味（Vollendungsbedeutung）は絶へず將來に依屬して居る。卽ち其等の財の重要は、彼等が後に來る或物に對する、前階段であると云ふことに、まさしく基因するのである。されば其等の財は將來財（ツークンフツボユテル）と稱せられることが出來る。之れに反して完全終結的箇體の範域に於ては、既に現在に於て完全終結が行なはれて居る。此處では財は、云はゞ其の一時的、時間的存在に於て休む爲めに、發達系列から拔け出すのである。されば吾人は之を現在財（ゲーゲンヴァルツボユテル）と稱することが出來る。

終りに又第三の範域も、時間と一定の關係を有つ。併し此の範域に屬する財は、材料が不終結的であるから、隨ふて如何なる時に於ても完全に形成され得ないから、將來に於ても亦現在に於ても存しない、夫れ故に只無時間的として考へらる可きである。吾人は此等の財を永久財（エヴイヒカイトツボユテル）と稱したい。但しかく云へばとて、此等の財の存在に就て、何事をも云はんとするのでないのである。時間的、地上的、感覺的或は內在的生活の財は、常に將來財か、或は現在財かであり得るが、然るに、吾人は永久財（吾人若しかゝる財を認めんとするならば）を、超感覺的なるもの、或

は「超越的なるもの」の世界に上さねばならぬ。而して此の見地に關しても亦、分類は完全である。一切の財は內在的生活の財であるか、又は超越界に存せねばならぬ。而して時間的財は只將來の財であり得るか、又は現在の財であり得るかである。是れ過古は完成傾向に關しては一の價値實現の舞臺として、何等の役目も演ることが出來ないからである。此くて吾人は此處にも亦、開かれた體系の要する分類の、一の超歷史的原理を獲得したのである。

三價値階段の關係　云ふまでもなく、三價値階段の概念は、吾人の生活意義の內容上の闡明に付ては、尙ほ吾人に何物をも敎へない。併し其等の概念は、一切の歷史的に制約されたる內容以上に超出する爲めには、空虛で或は形式的である可きである。只其等の概念は之れに依て價値の一の完全なる秩序だけでなく、又一の位階秩序をも作り上げる可能性を、吾人に與へるものであると、云ふことだけが肝要である。而して今其の事が成就されたのである。先づ初めの二つの階段を區別して考察すると、彼等の價値は相互に一の明白なる關係を作つて居る。最高の目標が立てられて居る處では、吾人は時間的實在として、完全終結を常に將來に推しやらねばならぬから全體の形成は過程に於ける一階段、卽ち前階段を以て滿足せねばならぬ。之れに反して、完全終結性が現在に於て成就される可き處では、吾人は全體を放棄して、一部分に限らねばならぬ。此くて兩範域は長所も亦短所も示し、夫れ故に先づ相互に同等視さる可きである。之れに反して完全終結的全體の第三價値範域は、右の兩者の長所を併合し、短所を棄てる。されば此の範域に於て、吾人は又吾人の考へ得る最高の財を見出す可きである。而して同時に夫れから、初めの兩階

段相互の關係に關して、新しき光りが投ぜられる。先づ完全終結的箇體の範域に付て考へるに此處に箇體に限ることは、此の範域が只夫れ自身に於てのみ考へられる以上、常に一の絶對的不足として現はれる。有限性の咀ひは、時間に於ける單なる現在的完全に常に附着する。之れに比すると、將來財が完全終結的全體に近づく可能性を有することは、本來之れに高等なる尊嚴を與へるのである。されど完全終結的箇體を完全終結的全體と必然的關係に於て結び附け、現在を永久に密着させることが出來るならば、(但し是れは價値體系によりて、解決され得るものでなく、只世界觀論によりてのみ、解決され得るものである)完全終結的箇體は超越的世界から淨化を受けるであらう。而して此の淨化は完全終結の傾向に關して、完全終結的箇體を將來財の不終結的全體以上にさへも置く。是れ將來財の不終結的全體の範域に於ては、全體に對する努力以上に出ることは決してなく、此くて完全なる終極は如何なる仕方に於ても、達せられないであらうからである。

此等の形式的價値關係を、更に詳しく論究することは此處では必要でない。是れ此處では只一般的に一の位階秩序の原理が、見出さる可きことを示すだけが必要であるからである。而して此等の原理の効果は、吾人が之を明らかに、內容的に決定されたる生活と結び付ける時に、始めて明亮にされ得るのである。されば吾人は歷史的文化內に於て、一の二者擇一に基づける分類原理の助けを以て、財の完全なる一分類を立てる可能如何と云ふ、既に揭げたる問題に立ち歸らう。

第三節　靜觀と活動及び物件と人格

活動的人格的社會的文化財　今此の分類秩序も亦超歷史的であらねばならぬであらう。而して夫れは只一切の文化財に於て、只一般的に見出されるものゝみに、注目するであらう。此くて吾人に一の出發點が與へられるのである。吾人は各文化人に付て、彼は人格者として、他の人格者との結合に於て、隨ふて一の社會的結合に於て生活し、何等かの仕方で、其の中に活動すると云ふ事が出來る。約言すれば歷史的生活に於ては、先づ第一に人格者が取扱はれ、第二に人格者の社會的結合が取扱はれ、第三に彼等の活動が取扱はれる。而して吾人は同時に此等三つの概念は、必然的に相互に結び附けられて居る事を見る。各人格的行動は、恐らくは非人格的なるものを越へて長い迂路を通つて行くであらうが、結局は一の人格者に結び付く。此の人格者は確かに結局は、只其の人格的行動を發出せる人、彼れ自身のであり得る。併し其の時でも、一の社會的要素が矢張り認められねばならぬ。是れ各人は一の社會的結合に於て生活し、夫れ故に其の活動は、一の反社會的性質（アンチソーシャル）を有する時でも、彼は社會的に活動すると稱せらる可きであるからである。而して此の最廣義に於ける社會的と云ふことに對立さる可きものは、反社會的と云ふことではなくして、非社會的（アソーシャル）と云ふことである。此くて吾人が文化財を、其の價値が活動的な或は能働的な、社會的人格者に附着する一の部類に總括することが、正當とされるのである。

靜觀的物件的非社會的文化財　併し同樣に明白なるは、此の部類中に一切の文化財が入り込む

のでないと云ふことである。吾人は活動的態度の外に、更に靜觀的態度を認めねばならぬ。而して其の態度の意義は、つまり最早世界に對して「實際的に」作働するのでなく、之を只考察の對象となすだけであると云ふことにある。此の分類は完全である。是れ此處には、只意義があり、價値實現に向けられる態度のみが問題となり、而して其の態度は常に活動としてか、又は靜觀としてか、特質附けらる可きであるからである。之れと他の、同樣に二者擇一的な反對が、最とも密接に結び付て居る。靜觀的態度は、確かに一切の體驗內容に結び付き得る。夫れに拘らず、此の態度に對して、夫れが向けられる對象は、社會的生活に於て、活動的人格者が之れに對して示すとは、異なれる性質をとるであらう。吾人が只靜觀的に考察するものは、吾人に對しては、吾人自身が人格者であり、又他人が行動に於て、吾人に對立すると云ふ意味では、最早「人格者」でない。靜觀に對しては、人格も亦寧ろ物件となり、夫れと同時に吾人が行動しつゝ、他の人格者と作る社會的結合から脫する。而して其の點に於て、靜觀の財は非社會的と稱せらる可きである此くて吾人の獲得する第二の主要部類は、靜觀、非人格性或は物件性、及び非社會的要素等の、必然的に相屬する概念によりて、規定されるのである。是れによりて財は再び完全に分類される蓋し如何にして一の財が人格でも亦、物件でもなければ、社會的でも亦非社會的でないと云はる可きかは、解し得られないからである。

今此の調整或は分類は其の完全性を離れて考へても、哲學に對して重要なものであることは、別に論證を要しない。靜觀と活動との對立に於て現はれる、理論哲學と實際哲學との分類は古い

もので、又夫れと同樣に、人々は對象を物件と人格とに分類するを常とする。併し吾人が此等の兩分類原理間に、一の必然的結合を認めることによりて、尙ほ他の或物が示される。夫れは二三の例を擧ぐれば、たやすく明らかにされる。例へは美的價値及び論理的價値は、古の前定の下では、兩者共に事物に附着し、夫れ故に一の部類の中に包括される。然るに倫理的價値は他の部類に屬する。是れ倫理的價値は、只人格に於てのみ見出されるか、或は精々の處で人格から事物に移し得られるものであるからである。更に吾人は藝術及び學問に對しては、靜觀的に作用するであらうが、併し人格に對しては、少なくも倫理的である以上は、常に何等かの仕方にて、活動的、能働的に作用するであらう。此の論理的價値と審美的價値との結合、及び彼等の倫理的價値からの分離は、屢々行なはれる如く、價値の單なる並列を立てるだけに止まらずして、一の超歷史的な、總ての時代に對して妥當する秩序を、立てることに吾人を導くのであるが、更に其の秩序は又一の統一的生活意義の闡明に對して、重要なる意味を有するものである。

靜觀の一元主義と活動の多元主義　終りに尙ほ他の、同樣に多く使用される哲學的概念が、此の調整と結び付けられ、而して少なくも體系の形成に對して、決定的である一の對立が、更に指示されることが出來る。今靜觀は其の本質上、一切の考へ得られる體驗內容に向けられ、夫れによりて靜觀の適用され得る全體の概念は、必然的に盡きる事なき、或は不終結的な多樣として規定される。而して夫れよりして靜觀は終極に達する爲めに、單一化を意味する統一化を求めると云ふ結果が生ずる。其の意味にて又吾人は、一の一元主義的完全終結の傾向を認めることが出來

る。之れに反して、吾人が活動的能働的態度は人格に結び付くことを考へると、啻に全體の概念が異なつて規定されるだけでなく、更に靜觀的態度に於ての如く、一元主義的傾向を最早認め得なくなる。活動の向けられる宇宙は、吾人が社會的關係を有する人格者の總體である。而して人格者が財として取扱はれる處では、人格者は常に其の箇性的差異及び多樣に於て考へらる可きである。されば活動的、社會的及び人格的範域に於ける價値實現の努力は、多元主義的性質を具有せねばならぬ。一元主義或は多元主義の概念對に於ては、まさしく他の分類原理に於ての如く、一の二者擇一が取扱はれて居ると云ふことは自明であり、而して夫れによりて、其の原理が文化生活の歷史的發達の流れの中に、引き込まれない財の一分類が、完全に與へられるのである。

此處に吾人はかゝる分類の根據を、深く探究しやうとは思はない。既に述べしことで、吾人の目的には充分であると思ふ。夫れによりて、歷史的文化財の實在（其等の文化財の主要部類が、三つの完成階段に從ふ價値秩序と結び付けられ、夫れよりして如何に六つの價値範域の體系が生起するかを、洞察することが可能である限りに於て）は、一の體系に作り上げられるのである。而して此の體系にありては、一方に於ては現在の財は、其の價値が一の位階秩序或は階段順序を示す樣に整へられ、他方に於ては同時に今後歷史的發達が、他日吾人の意識に齎らし得る文化價値に對する餘地が、設けられて居るのである。